

もう一まいのカード

サッカーの試合で使われる「イエローカード」と「レッドカード」を知っている人は多いと思います。どちらも、試合中にルールい反やきけんなことがあった時、しんぱんが選手に見せて注意をするためのカードです。イエローカードを二度見せられた選手は退場、レッドカードの場合は一度で退場となります。

ところで、サッカーにはイエローカードでもレッドカードでもない、「もう一まいのカード」があることを知っているでしょうか。

平成二十一年 第三十三回全日本少年サッカー大会（十二さい以下）の準決勝のことです。前年、この大会の準々決勝でおしくも敗れた川崎フロンターレと、準優勝だった名古屋グランパスという、共に今年こそ優勝をと練習をつみ重ねてきた実力のあるチーム同士の対戦です。多くの人注目する中で始まった試合は、両チームとも持てる力をあますところなく発し、ご角の戦いをくり広げました。結果、二対二の引き分けて後半が終わり、えん長戦でも決着がつかず、いよいよPK戦にとつ入しま



した。

グランパスの先攻で始まったPK戦は、たがいのしゅう念がぶつかり合いました。そして、両チームとも五人全員がシュートを決め、PK戦もえん長戦となりました。足がふるえるほどのきんちよう感の中で、まず、先攻のグランパスの選手がゴールをねらいます。カいっぱいけったボールはみごとゴールネットをゆらしました。はく手とともに、さらに高まるきんちよう感の中で、後攻のフロンターレの番になりました。このシュートを外すとグランパスの勝利が決まります。

グランパスのキャプテンは、ゴールをねらうフロンターレの選手をじっと見つめました。

「……………」

会場が静まり返る中、フロンターレの選手がゴールを目がけて思いきりシュートをしました。

「ああっ。」

ボールは、クロスバーに当たり大きくはじかれました。このしゅん間、フロンターレの敗北が決まりました。PKを外した選手は、そのままグラウンドにくずれ落ちて

PK戦
同点で時間内に試合が決着しなかった時にいうもの。両チーム交ごにシュートをして、五人めまでに多く点を入れたチームが勝利となる。

しまいました。グランパスの選手たちは、かたを組み、チームみんなでグラウンドの中心で勝利を喜び合いました。

そんな中、グランパスの選手の喜びの輪から、一人の選手がずっとぬけ出しました。それはキャプテンでした。

向かった先には、シュートを外し、泣きぐずれているフロンターレの選手がいました。キャプテンは、立ち上がれずにいるその選手のとなりによりそい、かたに手を置いて話しかけました。真けんに、何度も。やがて、その声にこたえるようにフロンターレの選手はゆっくりと立ち上がり、グランパスのキャプテンとならんで歩き始めました。



その時です。笑顔で二人のすがたを見守っていたしんはんが、イエローカードでもレッドカードでもない、「もう一まいのカード」を高々としました。すると、おうえんに来ていた人々から、はく手が起こり始めました。初めは小さく、じよじよに大ききく……。

温かいはく手が鳴りひびく中、両チームの選手たちはたがいの健とうをたたえ合いました。

カードの名前は、「グリーンカード」。
フェアプレーのせい神をたたえるカードです。

(螺良 幸生 作)



グリーンカード
サッカーの試合で、しんはんがフェアプレーのせい神を發きした選手に対してしめすカード。

日本では、十二さい以下の選手の大会を対象にフェアプレーをすすめるためにどう入さされている。イタリアでは、プロの試合でもどう入されている。